【令和７年度小学部の実践】

１　今年度の重点

１年目で深めた「子ども理解の方法」を継続し、２年目は、子どもの「自分らしい学び方」が創り出せる「授業づくり」に重点を置く。そこで、新たな事例児童を挙げ、子ども理解に基づいた授業づくりを２回行う。２回の実践を通して、子どもの「自分らしい学び方」や「できた」実感など、見えない内面の成長を具体的な姿で捉え、積み重なるように活動をつなげていくことで、子どもの「できた」実感のさらなる高まりを目指す。「単元で捉える児童の学び」や「エピソード記録」を活用し、活動に対する子どもの言動と心の動きを見える化し、言動にできない子どもの思いへの「共感」や、子どもの行動が変化していく「活動」など、「フィードバック」の方法を整理しながら授業づくりに取り組んでいく。

２　小学部の取り組み

(１)事例児童（以下児童Ｂ、または、Ｂさん）について

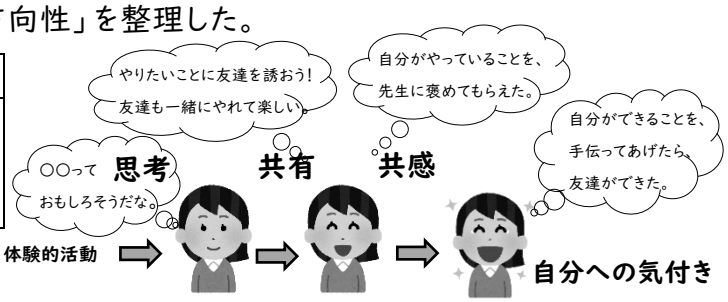
学校生活の中で、大体のことができているように見取れる一方で、本人に「できている」実感があるのかと、「できた」実感の捉えにくさを感じていた。そこで、「子ども理解シート」を使い、以下のようにＢさんの「得意なこと」「苦手なこと」など学び方を整理した。

得意なこと	苦手なこと
・提示された絵や友達の動きなど、視覚的に捉えたことに注意を向け、動きを模倣したり、知っている語彙（名詞や動詞）で答えたりすること ・下級生の面倒をみたり、一緒に好きなことをしてくれる友達を誘ったりすること ・目の前の様子から自分の体験を想起し、二語文程度で話すこと ・着替えやマッチング課題など、見て分かることを短時間でやり遂げること ・状況に沿った言動を〇×で判断し、正すこと	・平仮名を読んだり、書いたりすること ・相手の気持ちを読み取ること ・自分の感情をコントロールすること ・慣れない人と新しい関係を作っていくこと ・過去の出来事やそのときの感情を、言葉だけで説明すること ・3、4場面ある話の内容や順番を覚えること ・三つ以上の比較など、複数を同時に捉えること ・抽象的な思考や比喩表現を理解すること ・自発性や創造性が求められること

児童Ｂは、見たままを模倣することが得意な一方で、目的の理解や他者理解までは難しい。そのため、安心できる関係でのかかわりを楽しんでいる。また、決まった動きの活動は、遂行力が高いが、創造性、複数の情報処理は苦手である。そこで、新しいこと、分からないことは、周りの友達を模倣しながら取り組んでいる様子が見られる。このように、Ｂさんの「学び方」を整理し、普段よく目にする姿の要因を知ることができた。

「安心できる先生や友達と一緒がいい。」「友達が楽しそうにしていることを、私もやりたい。」「新しいこと、分からないことも、友達を見てやれば大丈夫そう。」など、児童Ｂの『やりたいと感じていること（内面）』を汲み取り、教師が「１年後に期待する姿」と「支援の方向性」を整理した。

「１年後に期待する姿」
〇周りの様子から自分が「できる」ことを見つけること 〇活動を共有したい相手と心地よいやりとりを継続したり、アレンジしながら活動を続けたりすること



教師が「１年後に期待する姿」を引き出すＢさんへの「支援の方向性」
・自分のやることに見通しがもてるような活動の手順を提示 ・活動自体を楽しみ、「できた」と自信をもてる体験 ・繰り返しの活動と、自ら「こうしたい」と思い（意思）がもてる「きっかけ」づくり ・周りの人を誘ったり、友達の様子に合わせて行動したりする姿を引き出すような、「やりが

い」ある体験

(2)授業実践①（７月　生活単元学習）

単元名	生活単元学習「バスにのって、しゅっぱ～つ！しずおかえきにいこう！」
学習集団	小学部２組　６名
単元で目指す姿	・自分たちの力で目的地(静岡駅)まで行く活動を通して、バスの乗り方や路線図の理解を深め、友達とやりとりしたり、関わり合ったりする力を高める。 （生活科２段階　社会の仕組みと公共施設）

時数	学習内容・学習活動
1	バスについて考えよう ・バスをテーマにした絵本の読み聞かせ ・路線図を見る ・静岡駅に行くことと当日までにやることを確認
3	バスの乗り方教室をしよう ・バスの乗り方やマナーを知る（チェックリスト作り） ・静鉄バスの乗り方教室
4	バス停シールラリーをしよう ・学校近くのバス停から静岡駅までのバス停の確認（路線図作り） ・校内で、バス停シールラリー ・路線図にあるバス停まで歩いて探す
4	静岡駅に行こう！！ ・しおり作り ・静鉄バスに乗って、静岡駅へ行く ・本屋で好きな本を買う

【B さんの「わかった」実感と意思の表出】

〇バスはこうやって乗る！（バスの乗り方教室）

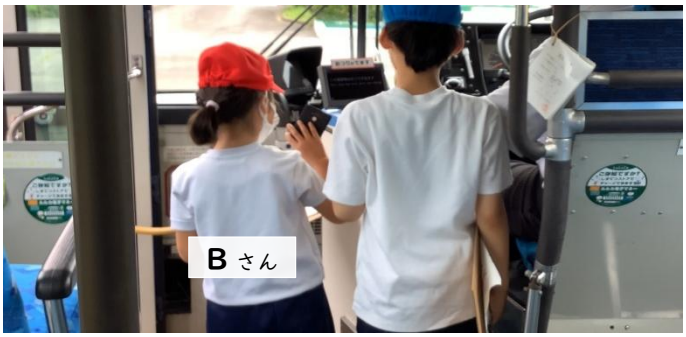
～「わかった」ことは、友達に教えてあげるＢさん～

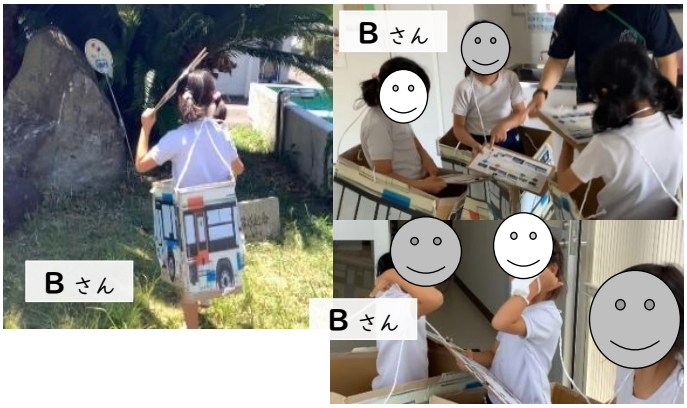
静鉄バスの乗り方教室の直前に、教室で「チェックリスト」を使い、「IC カードをタッチする」「静かにする」「途中で席を変えない」など、乗り方の具体的な行動を確認していた。バスに乗り込むと、手に持っていた IC カードを自分から機械にタッチしていた。また、普段バスに乗っていない友達に、「ここだよ」とタッチすることを教えていた。バスの扉が閉まると、隣の友達に「しー」と伝えたり、前方で立っている教師に「座って、座って」と教えたりしていた。適度な緊張感をもち、隣のクラスの友達を見つけて立ち上がって手を振るも、うれしい気持ちを押さえ座り直した。

〇バス停を探すぞ！（バス停シールラリー）

～進んでバス停を探すＢさん～

静岡駅までの動画を見て、「静岡駅」のアナウンスを聞き、「あっ」と降りるバス停であることを教師に伝えていた。廊下に置かれたバス停を順にめぐりながらシールラリーが始まった。友達４人で出発すると、路線図ボードをハンドルのように動かして、先頭を歩く。バス停をすぐに見つけ、「あった」と喜び、シールを路線図に貼る。「みんな、行くよ」と指示を出したり、友達を順番に並べたりと楽しく参加していた。次の日、路線図やバス停の近くにある建物を手掛かりに探せるように、バス停を外や階段にも設定する。ビオトープにあるバス停が見つからず、中学部棟へどんどん行く。教師にヒントとなる建物の名前や位置を教えてもらったり、先に気付いた友達の動きを見たりすると、その近くからバス停を探すことができた。





７月の授業実践では、『単元で捉える児童の学び』を活用し、上記のように「わかった」実感と意思の表出を見取ることができた。毎時間の児童Ｂの「言動」と「思考」から、「わかった」実感の背景（きっかけとなったこと、学び方や性格など個人因子）も整理し、「期待する学び」につながる学習活動や支援を整理してきた。

そして、児童Ｂの「７月単元での学び」と実践から捉え直した「自分らしい学び方」を以下のとおり整理した。

７月単元でのＢさんの学び

・チェックリストで確認した「乗り方」を守ろうとする姿
・クラスの友達と静岡駅まで行くことに緊張しながらも、毎朝母と乗っているバスについて、知っていること、分かったことを、友達や教師に教える姿
・静岡駅で降りることを理解し、一つ前のバス停や降りるバス停のアナウンスを聞き、次に降りることを周りに伝えたり、自分からリュックを背負ったりと、適切な行動をしている姿

▼

Ｂさんの「自分らしい学び方」（７月）

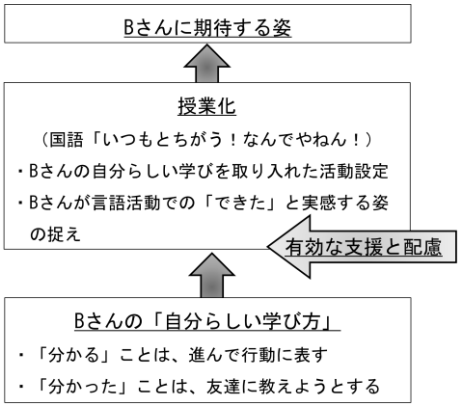
〇自分のやることが分かると、進んで行動で表していくこと
〇楽しいこと、緊張することでも、わかったことは、活動を共有する友達や教師に教えようすること

Ｂさんが「わかる」活動を積み重ねることで、教師も「できたね。」とＢさんに共感することができる。Ｂさんにとっても、他者からの評価によって、自分自身が「できているんだ。」と実感を創り出していける。だからこそ、活動を共有している教師が、Ｂさんの実感を汲み取り、「活動」と「感情」の「共有体験」を生み出すことが大切だろう。

後期の実践に向けて、Ｂ さんの実感を汲み取って授業づくりを進めるために取り入れいきたいことを、以下の二点にまとめた。

質の高い「できた」実感がもてる活動設定

前期の実践のように、「わかることは、進んで行動に表す」「わかったことは、友達に教えようとする」 とＢさんの「自分らしい学び方」が引き出される学習活動を検討する。Ｂさんの「わかる」「わかった」活動でつないでいくことで、Ｂさんは周りの様子から自分が「できる」ことを見つけ、活動を共有したい相手と心地よいやりとりを継続したり、アレンジしながら活動を続けたりと、教師が期待する姿につなげていきたい。



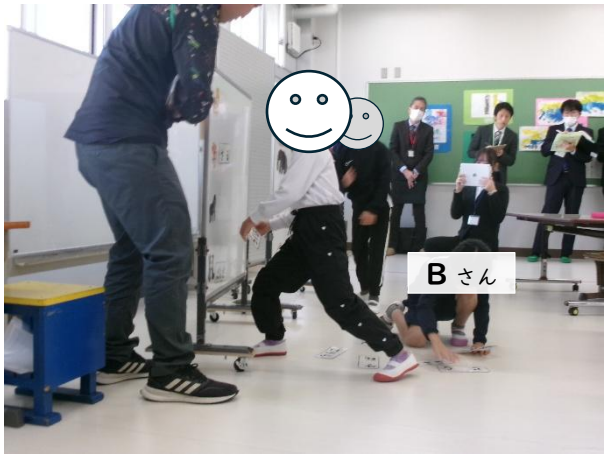
学びの関係性づくり（教師のかかわり方）

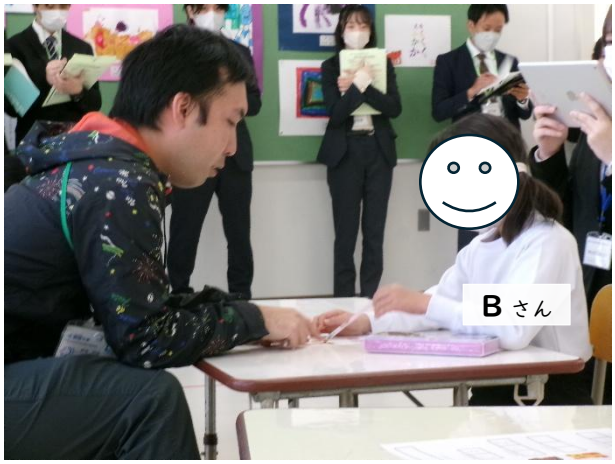
「エピソード記録」を活用し、授業だけでなく、生活全般からＢさんの「自分らしい学び方」が見られたときや、「できた」実感が感じ取れたときに、その行動の要因や、教師自身のかかわり方を記録していく。可視化された実感から、教師がＢさんの変容を捉え、捉えた変化や成長を共に活動する中で伝えていくこと（他者評価）で、その時々、できるようになっていることをＢさん自身が気付く姿につなげたい。

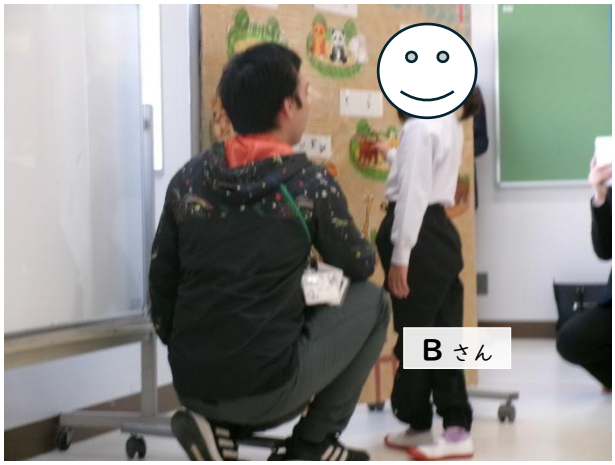
(3)授業実践②（11月 国語科）

単元名	国語『いつもとちがう！なんでやねん！』
学習集団	小学部３年生２名、４年生１名　計３名
単元目標	・日常生活場面のイラストを見て、あり得ない部分やあり得る部分を名詞や動詞、形容詞などの言葉を使って伝えることができる。 ・教師や友達の言葉を聞いて、あり得ない部分に気付いたり、あり得る場面を思い浮かべたりすることができる。 ・自分の気付きや考えだけでなく、友達との言葉のやりとりを通してあり得る場面をありえる言葉に変えたり、友達の言葉をまねしたりして自分なりに表現しようとする。 （国語科２段階　知・技ア（ウ）、Ａ聞くこと・話すこと（ア・ウ））

時数	学習内容・学習活動
1	どんなところが、「なんでやねん！！」 ・絵本『なんでやねん』を読んで、日常生活の一場面の「なんでやねん」の場面に気付く ・絵本の内容抜粋のワークシートを行う
7	周りのありえないを「なんでやねん」で、つっこもう ・一場面を表したイラストを見て、あり得ない部分を見つけ、「なんでやねん」で突っ込む ・どうしたらあり得る場面になるのか考え、その場にあったものに言い換える ・振り返りのワークシートに取り組む １章：おうち編 例）おうちの中の冷蔵庫が、自動販売機になっている →「おうちには、ないでしょ」 「冷蔵庫。自動販売機は外にある。」 ２章：公園編 例）サッカーをやっている子が蹴っている球がスイカ。 →「スイカ蹴ってる。なんでやねん。」 「蹴るのはサッカーボール。」 ３章：動物園へお出かけ編 例）パンダの色が黄色と赤 →「パンダは白と黒。」 チケット売り場で支払するときに葉っぱを出す。 →「葉っぱじゃだめ。お金でしょ。」 ４章：学校編 例）教室の水道に、冬野菜が育ってる。 →「水道はだめ。畑。」







1	今までの「なんでやねん」を振り返ろう ・今まで学習したことを振り返りながら、どんな場面が「なんでやねん」なのかに気付く ・振り返りをする

【エピソード記録】

エピソード記録は、特定の場面において見られた子どもの行動だけでなく、教師の捉えやそれに基づく対応を記述し、行動の意味や子ども理解を深めるための記録である。

・記録の視点

「今変わった。」「前と違うぞ。」と言った教師の直感的な変化、子どもの心の動きを捉えて記録するという観点から、B さんの受け答えの様子や表情の変化に注目して記録していた。また、特に B さんが「できた」実感をもつ瞬間を捉えたいという考えから、「誰かに評価されるとき」にも注目した。その後、研究授業の窓口を国語科に決めてからは、B さんが「言葉を使おうとするとき」に視点を定めて記録した。

場面	B さんのあらわれ	教師が捉えた B さんの心の動きと対応
7/14 路線図シールラリー	・課題に積極的に取り組み、できたことを自分の中で大切にしている様子。 ・成果を他者に共有する行動までは至らなかったが、自分はできるんだという姿を見せようと思っているようだった。	・「見せたい気持ちはあるが、共有の相手や関係に慎重なのかもしれない」と感じる。 ・自己肯定感の表出として“秘密にする”行動を理解し始める。
9/2 給食後の歯磨き	・教師の予想外の行動に対し、笑顔で強い反応を見せる。	・驚きやいたずらのような遊びが B さんの感情を引き出すことに気付く。 ・関係づくりの入口となる行動だと理解が深まる。
9/19 検査前の様子	・不安を示す行動（そわそわ） →呼ばれたとたんに落ち着く。	・不安はあるが、自分で気持ちを切り替えられる力がついていることに気付く。 ・終わった後は、すましてすんっとしている（表情に表れない）。
9/29 体育の授業後の片付け	・実習生や友達のモデルを見て片付けに参加する。 ・褒められても表情やリアクションは薄い。	・評価の反応は分かりにくいが、内面では満足しているのではと感じ取る。 ・「他者の行動を手掛かりに行動を組み立てる子」と理解が更新される。
10/15 休み時間の隠れ遊び	・隠れて驚かせようとする遊びを繰り返す。「シー。内緒だよ！」 ・たくらんだような笑みを浮かべて隠れ続ける。	・最初は“ふざけ”に見えがちだったが、「関係を試しつつ距離を縮めたい行動」と捉え直す。 ・安心感や親密さの表出であることを理解する。
10/21 給食後のやりとり	・一度伝わらず諦めかけるが、水筒や教師の歯ブラシセットなどの物を使って説明し直す姿が見られた。	・「諦めやすい」ではなく、「伝える手段を柔軟に切り替える子」と認識が変化。 ・コミュニケーション意欲の高さに気付く。

10/31 ハロウィンの恐怖体験	・「あれは絶対先生でしょ、なんでおばけになって追いかけてくるの。怖かった。」と、怖い体験を長めの言葉で説明することができた。	・「感情を伴う出来事」では、語りの力が引き出されると理解する。 ・語りの質は、「感情のゆさぶり」によって変わることを実感する。
11/6 朝の支度・昼休み	・語彙を適切に使う場面（もったいない） ・遊びの選択で「昨日行ったから今日は外。体育館はいいでしょ。」と理由づけをした。	・日常経験と現在を結びつける力があることに気付く。 ・説明や論理性の芽生えとして捉え直す。
11/11 保護者からの報告	・「わたしもできるんだよ、またいつか見てね！」と授業を参観できない母に対して主張した。	・自己認識が確かに育っていると理解が深まる。
11/14 国語導入のやりとり	・教師や友達の掛け声をまねし、仲間とタイミングを合わせて楽しむ。	・模倣は受動的ではなく「仲間参加の手段」と理解し直す。 ・集団参加の質が高まっていることに気付く。
11/17 国語授業（発展）	・友達の語りを受けて自分の語りを発展させる。 ・「（風呂場にあるのは）チョコじゃなくて、タオルでしょ。」と場面の誤りの指摘や言い換え活動にも積極的に関与している。また、「（タオルがあるのは）濡れちゃうから。」と因果関係の説明ができた。 ・教師の板書に合わせて単語をつぶやく。	・友達の発言がＢさんの学びを推進する“学習の連鎖”を生み出していると理解する。 ・主体的な参加が学習の手ごたえによって支えられていること、因果関係が分かると、理由づけして話せることを確認する。 ・本人ができた実感をもつためには、答えられた単語や理由をわかりやすく板書などで示したら効果的かもしれないと考える。
11/20 国語授業(発展２)	・家の中にあるものを問われ、玄関の絵を見て「足りない。足りない。寝るところ。テレビもない。」と言った。 ・たんすの絵を見て、名前は言わないが、「教室にある棚と同じだ。」と開けに行って主張する。自分の家のたんすを思い出し、「本がある。」と言った。	・違う場所のことを想起して発言できる力に気付く。 ・名前はわからないが、何に使うものかなどわかっていることを伝え、教師を手助けしたいという気持ちに気付く。
11/21 国語授業(発展３)	・次の課題の指摘する点を見つけようと先にのぞこうとしたり、注目したりしている。	・課題のパターンが本人に入っていることに気付く。
11/25 国語授業(発展４)	・友達の動きをヒントに発言している。 ・タイヤとびや平均台はどうやって使うものかをジェスチャーで伝えている。	・友達の動きをよく見ていてそれをヒントに発言できることに気付く。 ・友達との関係性からジェスチャーや物を使うなど伝える手法を習得していることに気付く。

11/26 国語授業 (発展５)	・前回の授業で、自分で書字した「ふんすい」はすぐ答えることができていた。 ・小さいジャングルジムを見て、「先生たちよりも大きくないとダメ。」	・書字をしたことがある文字や単語は読みやすくなるのではと考える。 ・身近な人と物の大きさの比較ができたことに注目する。
11/27 国語授業 (発展６)	・似ていることからイラストと言葉のマッチングで間違えてしまった「とら」と「らいおん」の名前を書きたいと自分から選んだ。 ・片仮名で書くことに挑戦しようとする。	・間違えてしまった単語を書いて覚えるという考えがあるのかもしれないと考える。 ・新しいことを覚えたい、知りたいという気持ちが強いと感じる。
11/28 国語授業 (発展７) 【研究授業日】	・教材を提示されても無表情で黙っていたこともあったが、教師の手と動物のイラストをしっかり目で追っている。 ・課題に取り組んでいるうちに緊張がほぐれてきたのか、友達が見つけたイラストを見て、「だめだよ、だめだめ～」とフレーズのように言う。 ・学習活動が変わるとまた無口になった。	・緊張でいつもと様子が違ったが、教師や友達の様子を観察して課題を把握しようとしていると解釈する。 ・本人が安心できる環境や状況になると出てくるフレーズに気付く。 ・答え方のパターンがわかり、自信があると発言が活発になるが、わかってきたころに活動内容が変わってしまうと様子を伺うように静かになるのではないかと推測した。
12/5 国語授業 (発展８)	・毎日使っている「ホワイトボード」の名前が出てこない。 ・動画を撮る教師や参観している教師がいるとしきりにその教師を見る。 ・平仮名で書いてある「たこ」を見て、「カタカナが良かった。」	・ホワイトボードなどあまりにも身近なもののことを「これ」「あれ」など指示語で言ってしまって定着していない可能性があると感じる。 ・自分ができることを授業者ではなく参観者に評価されたいという気持ちに気付く。 ・まだ自分が習得していないことを習得したいという気持ちがあるように感じる。
12/9 国語授業 (まとめ)	・はがしたイラストは正しいことを書くためにホワイトボードに貼るという教師がやる行動も自分から積極的にしている。 ・大きい牙をもつカバのことを「鬼」と言い直す。	・授業の流れが完全に B さんの中でパターン化できていることに気付く。 ・前回、カバのことを「らいおん」みたいと言って伝わった実感がなかったのか、言い直したことに気付く。

「エピソード記録」から、教師の B さんに対しての捉え方も変容していき、B さんの「自分らしい学び方」や「伝達手段の広がり」、「できた実感の形」などを捉えることができた。また、それを B さんの強みとして、視覚的手掛かりの提示や模倣を利用した指導など、学習内容や教材づくりにも反映した。

３　まとめと次年度に向けて

(1)自分らしい学び方を取り入れた授業づくり

11 月単元の「エピソード記録」から B さんの学びを以下のように整理することができた。

11 月単元での B さんの学び

・イラストから「ありえない」状況に気付くと、前に来て、名詞や指さしで指摘できたこと
・家の中にあるものを問われると、玄関の絵を見て「足りない。足りない。寝るところ。テレビもない。」や、小さいジャングルジムの絵を見て「先生たちよりも大きくないとダメ。」など、長い文で話せたこと
・「(風呂場にあるのは) チョコじゃなくて、タオルでしょ。」「(タオルがあるのは) 濡れちゃうから。」と理由を付けて話せたこと
・「たんす」の名前が分からなくても、教室の棚の開き扉を開けてイメージしている物を伝えようとしたり、大きな牙のあるカバの特徴を、「ライオンみたい」から「鬼」と教師の反応を見て言い換えたりと、相手に伝えるために工夫したこと
・ライオンの足の数を正しく数えると、他の動物のイラストも足の数に着目して答えたり、前回の授業で書いた遊具の名前を答えたりと、短期的に新しい言葉や言い方を覚えて、自分の言葉で答えたこと。

後期の実践では、前期の実践で捉えた B さんの「自分らしい学び方」が創り出せるように授業づくりを検討してきた。年度当初の学部教員間の話し合いでは、B さん自身は「できている」実感があるのかと捉えにくさを感じていたが、上記のような「11 月単元での B さんの学び」の姿から、B さんの「自分らしい学び方」を「わかった」ことを進んで行動に表したり、教師や友達に教えようとしたりする姿だけでなく、以下のように整理できた。

B さんの「自分らしい学び方」(２月)

① 自分の気付きや経験を基に、主体的な行動ができること
② 安心できる関係性の中で、言いたいことを長文で話せること
③ 見えないことも、理由づけや比較など思考していることを言語化できること
④ 「言いたい」「伝えたい」意欲が高まり、伝達手段が広がったこと
⑤ 友達の発言や学習文脈を手掛かりに言語が活性化すること

さらに、11 月の実践後、B さんに期待していた「1 年後の期待する姿」について、「エピソード記録」や日頃かかわりのある教師の見取りから変容を整理した。

「1年後に期待する姿」(年度当初)
○周りの様子から自分が「できる」ことを見つけること ○活動を共有したい相手と心地よいやりとりを継続したり、アレンジしながら活動を続けたりすること

▼

<思考>

・UNO のルールが分かると、勝つために特殊カードを使おうとする。
・ハンドベースボールのルールが分かると、自分が負けないように、教師がいない所を狙って打つ。
・給食のワゴンや布巾の片付けなど、教師や上級生がやっていたことに意欲的に取り組む。

<他者と共有・共感体験の中での喜び>

・家族との出来事から、教師との話が膨らむ。
・輪飾り作りでは、一緒に作っている友達と競争しながらたくさん作ろうとする。

<自分への気付き>

・最近覚えた係の仕事は、率先してやり、近くの教師を呼んで、できるようになったことをアピールする。
・参観日に母が来れないと、「わたしもできるんだよ。またいつか見てね。」と主張した。

これらのエピソードから、B さんは、見たままを模倣することが得意だからこそ、カードゲームや係活動などのやり方を理解し、繰り返しの活動の中で自分の力として定着していくことが分かった。また、体育のハンドベースボールや輪飾り作りでのエピソードから、B さんは、自分が「わかる」ことに取り組み、さらに教師や友達との一緒に活動する中で喜びを感じると、「できて

いる」と自分への気付き（＝できるようになった実感）につながっていくだろう。また、B さんは表情には出なくても、行動の変化から「わかった」「伝わった」など内的な充足感の高まりを見取れるなど「できた実感の形」が見えてきた。

Ｂさんの実践を通して、子どもの「自分らしい学び方」が創り出せる「授業づくり」には、教師が、子どもの「わかる」活動の先に見られる言動に着目して、子どもの「気付き」や「わかった」「できた」の実感を見取っていく力が必要だと感じた。

(2)子どもに期待する姿へのかかわり方や授業改善につながる「エピソード記録」の活用

9 月以降の「エピソード記録」を通して、B さんの語彙力、連想する力、パターン化や視覚的模範的な学び方、学習意欲の高さ、他者から認められることへの喜びなど、Ｂさんの内面的理解を深めることができた。子どもの変化を記録する観察記録と異なり、エピソード記録は、教師の子どもへの思いも記録することができる。教師自身が、子どもの「学び」や見方が変化していることに気付き、子どもの内面的理解を深めていくことで、子どもに「期待する姿」に向けた自身の「かかわり」や「学習課題の見直し」など授業改善につなげていくことができるだろう。

今回の記録でＢさんの内面的理解を深めることができたのは、Ｂさんが言葉を使おうとしたときに記録の視点を絞ったこと、担任が継続的に記録したこと、Ｂさん自身が単語や 2 語文程度ではあるが言葉を伝達手段として獲得し始め、伝えたい思いをもっていることなどが要因である。

来年度は、子どもが「できた」実感のある活動を積み上げ、「できた」実感がさらに高まるような変容を目指したい。小学部の子どもたちは、記憶を長期的に保持したり、自分の言動や感情を俯瞰して認識（メタ認知）したりすることの困難さや、表出手段の未熟さなど、発達の初期段階の子どもたちである。そんな子どもたちが、「できた」と実感するためには、教師が、子どもとの共有体験の中で、子どもの態度や行動の変化を見取り、共感したり提案したりしていくことが大切である。子どもたちは、安全な場所で、安心できる教師や友達との関係性を土台に、目の前の事象に着目し、「わかった。」と実感することで、B さんのような主体的な姿や思考する姿など、態度や行動に変化が見られるだろう。教師は、その変化を見逃さず、教師が捉えた子どもの変化（行動の変化、気付き、感情など）を、共有体験を通して伝えていくことで、自分ができるようになったことや、自分の好きなこと・得意なことなど、自分への気付きにつなげていきたい。

そのために、「エピソード記録」を活用していけるだろう。今後も、「記録用紙」を使い、期待する姿につながる具体的な言動に記録の視点を絞り、エピソードを残していく。さらに、「概要、分析シート」を使い、子どものあらわれから「教師の対応と捉え」と「授業改善につながる材料」を考察しながら、授業改善に活用していきたい。

【来年度のエピソード記録の取り方と活用方法】

1．事例児が決まった時点で記録をスタート
　生き生きすることやそのときの様子、できた・評価されたときの反応、教師が印象に残ったことなどを主に記録していく。

2．視点を定め、視点に沿って記録していく
　表出や何（言葉やジェスチャーなど）をよく使う子か

＜書式＞

①「記録用紙」は、今年度の書式。枠だけのものを印刷するなどして手書きでメモ程度に記録していく。この記録は基本残さない。
記録者：事例児のクラス担任２人（教師対子ども、子ども同士の関係性が異なるため）

○／○ 「場面」	エピソード （「どんな手掛かりで？」「どんな心の動きで？」「どうかかわると伸びる？」）

②「概要、分析シート」は、以下の書式を使い、学部教員全員で作成していく。

場面	子どものあらわれ	教師の対応と捉え	授業改善への材料
日にちや授業名など	事例児のクラス担任がメモ程度に記録したものを簡潔にまとめて書く。 （概要）	学部教員全員で子どもの言動を教師がどのように捉えているかを第三者的視点で分析して書く。 （感じたことで良い）	学部教員全員で教師の対応と捉えからもし授業改善に使えそうな材料があったら書いていく。 毎回でなくてもよい。
例） 11/17 国語の授業 （発展）	・友達の語りを受けて自分の語りを発展させる。 ・場面の誤りの指摘や言い換え活動にも積極的に関与。	・友達の発言がＢさんの学びを推進する“学習の連鎖”を生み出していると理解。 ・主体的な参加が学習の手ごたえによって支えられていると確認。	・模倣を利用した指導を取り入れる。 →正しい教材を隣に貼っておく。 ・友達の発言を言語モデルとして扱い、言語活動を広げるきっかけとする。 →他の児童の発言を積極的にひろっていく。

・学部研究の軸として使用していき、遅くとも本時の前の週の学部研究までで記録打ち切り
　→学部研究で検討→最終授業改善